

■ルキノ・ヴィスコンティ監督幻の処女作！

郵便配達は

OSSESSIONE

〈妄執〉／提供インターナショナル・プロモーション



二度ベルを鳴らす

〈日本初公開〉

あまりにも強烈な映像のためファシストによって上映禁止
没収！！上映不可能といわれていた傑作！遂に公開！！

原作ジエームス・ケイン／新潮社刊・講談社刊／音楽ジョゼッペ・ロサーティ／マッシモ・ジロツティ／クラ・カラマイ／ジユアン・デ・ランダ



郵便配達は二度ベルを鳴らす

貴族の血を証明するかのような絢爛たる様式美と気品。「家族の肖像」から「イノセント」と故ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画美学が今、華麗なブームを呼んでいます。

そのヴィスコンティを知る上で最も重要な作品がこの処女作「郵便配達は二度ベルを鳴らす」です。これを最初に映画化しようとしたのはフランスの名匠デュヴィヴィエ（「望郷」）でした。彼はこの企画を親友のジャン・ルノワール（「どん底」）に譲り、ルノワールは彼の助監督をしていたヴィスコンティの第一回監督作品用に渡したという、いわくつきの映画です。脚本も凄く顔ぶれ、「にがい米」の名匠デ・サンティス筆頭に、ピエトラ・ランジェリ、ブッチーニなど一流の監督揃いです。

主演のマッシモ・ジロッチは、ヴィスコンティの遺作「イノセント」にも出演し、何やら因縁めいたものを感じさせます。 上映時間 2 間 13 分

噴き上げる情熱、破滅の美学
巨匠ヴィスコンティ衝撃の処女作
遂に日本初公開！

OSSESSIONE

提供 インターナショナル・プロモーション



郵便配達は二度ベルを鳴らす

〈映画評論家〉

佐藤忠男

ルキノ・ヴィスコンティの「郵便配達は二度ベルを鳴らす」は、第二次大戦中につくられ、ファシズム政権によって上映禁止になった傑作として、長い間、伝説的に語り継がれてきた幻の名作であった。上映禁止にはなったが、ローマの中央実験映画センターでは映画人や映画志望の学生たちのために上映され、これこそわれわれの求めていた真実の映画であると論じられて、敗戦後直ちにはじまる有名なネオ・リアリズムの気運の導火線のような役割りを果たした作品であったというのである。

じつさい、この映画は、製作後三十七年を過ぎた今日見ても、驚くべき力強さをもって人間の欲望と情熱を描きぬいた傑作である。処女作らしいみずみずしい覇気を感じさせる作品でありながら、同時に、じつに行きとどいた成熟した作品でもある。新人らしい稚なさはどこにもなく、のちに巨匠と呼ばれるようになってからの作品とあまり変りのない悠々たる重厚さをすでにそなえている。

ファシズム政権から上映禁止になったといっても、これはべつに反戦映画や体制批判映画であつたわけではない。ただ、どうしても好きになれないずっと年上の夫との平凡な生活をつくづく嫌になつていく女（クララ・カラマイ）と、彼女と一目惚れで好き合つてしまつた行きずりの放浪者（マッシモ・ジロッチ）とが、たがいに自分でもどうにもならない妄執（これが原題）に引きづられて女の夫（ジュアン・デ・ランダ）を殺してしまう。しかし罪の上に甘い結びつきを生じさせるのは容易なことではなく、結局、ともに破滅につんのめつてしまふという物語である。題材自体はありふれたものだが、現在の生活にどうしてもがまんできかない女、個人的な欲望で前後の見境もなくなくなつてしまふ男女、そして彼と彼女をとりまく貧困と低滞と居たたまれないゆううつさ、などなどの描写の迫真性は、国民をきれいに道徳で引つばつて戦争に投げ込もうとするファシズム政権にとっては、戦争なんて知らないよ、と、わざわざ目の前できつぱりソップを向かれたようなものだったに違いない。原作はアメリカのジェームス・M・ケインのハード・ボイル小説であるが、この映画は原作とは骨組になるシチュエーションがあるていど共通しているというだけで、ほとんど全く別

ものであると言つていい。原作も傑作なのであるが、そこでは主人公は血も涙もない兇暴な男であり、女主人公もまた、それに輪をかけた性悪のエゴイストである。ビスコンティは、この欲望一筋に生きることに全く悔いない男女を、古典的なロマンスのヒーローとヒロインにつくり直している。すなわち、女は、世が世なら愛する男によって幸福であるはずなのに、不幸な運命にからめとられて泣いている悩める姫君であり、男は、その姫君を救うべくここにやってきた王子であるはずなのに、なぜかロマンスの成り立たない酷薄な世に迷い込んだらしく、颯爽たるヒーローぶりをのびのびと示すことのできない不運な男である。二人の恋はさながら伝説の「トリスタンとイゾルデ」のように運命的に生じ、そのどうにも自己制御の利かないパッションもまた、ほとんど神話のように壮麗である。二人は情痴に迷つた愚かな男女以外の何者でもないけれども、しかしそこには、ふつうのその種の男女がまぬがれ難い卑しさがみじんもない。むしろ彼らは、ロマンスの成り立つはずのない卑小な時代にあつて、あえてロマンスの伝統に殉じる以外の生き方を知らぬ、愛という信仰の殉教者のように見えるのである。

ビスコンティの秘術は、この愛の信仰を朗々とうたいあげるにあたつて、いわゆるロマンチックな道具だてをいっさい排し、逆に徹底的に現実的に風俗描写を展開しているところにある。それは一見矛盾だが、その矛盾からこそ、フィルムに傷をつければ血が噴き出してきそうな、真に痛切な情感が溢れてくるのである。間違つていゝのは現実のほうなのか、それとも自分たちののか!? と。現実描写が一点の疑いも許さぬほど堅固であればあるほど、間違つていゝのは情痴に狂つた二人のほうだといふことになるが、だからといってこの二人の愛の稀に見る鮮烈さを軽々と否定できるだろうか。

原作では卑劣な弁護士とその助手が登場して主人公たちをエサにして悪質な金儲けをしようとする。ビスコンティは原作のこの重要な人物を削つて、代りに、人民の俠気をさりげなく体現しているような香具師を登場させている。私にはこの人物こそ、現実とロマンスの両方を見つめてファシズム政権下にどうしたらマトモであり得るかを模索しているイタリア人の代表者のように思えた。

この映画はどの人物も忘れ難い強い印象を残す。まぎれもなく映画史上の重要な作品のひとつである。

5月下旬独占ロードショー！

音協特別鑑賞券880円前売中！

有楽シネマ (201) 3066

国電有楽町駅中央口前